

石見・中野「有久本」「新宅屋本」所載田植歌について

田 中 瑩

はじめに

石見の国中央部に位置する島根県邑智郡石見町中野に、近世の書写にかかる田植本が二本残されている。

- ①「中野・有久本田植歌集」（文政一三年写、山路興造翻刻、日本庶民文化資料集成5所収、以下「有久本」と略す）
②「中野・新宅屋本『歌乃雙紙』」（文化一四年写、田中瑩一翻刻、山陰地域研究・伝統文化1所収、以下「新宅屋本」と略す）の二本である。

①には奥書きに宝暦十一年の祖本を写したとの記述があり、成立をそこまで遡らせることができるとすれば書写年代を記した田植本としては最古のものということになり、田植歌研究のうえで貴重な存在である。しかしこの本には一部に破損があり歌本の全体を見通すのに不安がある。②には破損箇所がなく、こちらは歌本としての全体像を見ることができる。そこで、たとえば①に欠ける部分について②を手掛かりに推測する試みがあつていい。また、大部分の歌が「有久本」のそれと共通するので、彼此対照して歌意の明らかに

なる歌も少なくない。しかし、両者の内容はよく似ているとはいっても相違点もあり、①②それぞれの、歌本としての性格を明らかにしておかないと、上のような試みも無批判には許されまい。

友久武文氏は『続校本田植草紙』の解題で次のような点を指摘しておられる。「新宅屋本」にあつて「有久本」に欠ける歌が四二首あるが、その中の二二首は田植草紙の系統諸本に見られない「新宅屋本」独自の歌詞である。「有久本」には独自歌詞はほとんどない（苗取歌に二首あるのみ）から「新宅屋本」にはかなり特異な増補発展があるとしなくてはならないと友久武文氏は述べておられる。

本稿の関心から言えば、その四二首のうち「新宅屋本」独自歌詞を除いた残りは他の田植草紙の系統諸本にあるわけだが、それらはどういう性質の歌であるのか、「新宅屋本」がそれらを含んでおり、「有久本」がそれらを含んでいないということは何を意味しているのかという問題が残る。

本稿では右のような点への考察を試みながら「新宅屋本」、「有久本」それぞれの特徴を考えてみたい。

友久武文氏は『校本田植草紙』で田植草紙の系統諸本を四つのグ

ループに分けて整理しておられる。Iは広島県山県郡大朝町を中心

に、一部、島根県側の、美濃郡、那賀郡、邑智郡にわたって伝承さ
れる狹義「田植草紙」の系統である。（この中をさらにA=完全本系、

B=略本系、C=再編本系に三分する）。IIは広島県山県郡から高
田郡、さらに安佐町にわたって伝承される「川根本」（以下各田植

本については私案による略称を用いる）や「刈田本」などの系統で
ある。IIIは広島県安佐町を中心に伝承される「田うゑ歌写」や「敷
本」などの系統である。IVは本稿の考察対象である島根県邑智郡石
見町を中心いて伝承される「新宅屋本」「有久本」などの系統である。

IIには他に「青笛本」や「小切本」などがある。
IVの特色としては、各田植本の冒頭に、独特の「さんばい由来書き」が置かれていること、また、歌詞の組織が一二番構成（「田植
草紙」のように全体を朝歌、昼歌、晩歌に区切り、それぞれの中を
さらに四番に分かつ）をなしていないことなどがあげられる。そこ
で、まず「さんばい由来書き」と組織の問題について考えておこう。

一、「さんばい由来書き」について

(II)、それ

いにしへ日本は大海にてまします也……

a (鍤、鍬、えぶり、大足などの使用と日本國の生
成)

それにあて

b (さんばいまつりの仕方)

又

c (苗打ちの仕方)

又

d (歌大工が歌をあげ損なったとき、鼓頭が先生使
いと争ったときのおさめ方)

田うゑ歌の双紙（と）もふすは……

a (双紙の由来)

b (歌の主題)

c (歌う心得)

「新宅屋本」冒頭の「さんばい由来書き」は「^{せんばい}三配」の由来を
委しく尋奉に……」と書き出されている。以下、接続詞に注目して
内容を整理すると次のようになる。（）内は私にまとめた記述内
容の見出しである。

(一) 抑

三配の由来を委しく尋奉に……

a (さんばいの由来)

b (さんばいの八子とその威徳)

c (さんばいの転生「三月、五月、七月、十月」と
その威徳)

つまり、全体は(I)=さんばいの由来、(II)=さんばいまつりの
由来、(III)=歌双紙の由来、といった三部構成としてとらえること

ができる。

「有久本」は(Ⅱ)のdの末尾以下が破損し失われているが、そこまでの本文は「新宅屋本」とほとんど相違がない。そこで、「有久本」の破損部分を「新宅屋本」で補つて考えても大きな違いはないだろう。

ただし、「有久本」では(Ⅱ)の初めの「それ」が「けれ」となつており、また、(Ⅱ)のbの前の「それにあて」が「それ」となつてゐる。このことについては以下のようによくわしく尋ねることができる。

の系統の「横路本」にもほぼ同内容の「さんばい由来書き」があるが、いずれも一つ書きに区切りを示して記述されている。「天川本」の場合をあげると次のようである。(表記は適宜改めた。)

一、「抑々さんばいの由来よくわしく尋ね奉りに……」

一、「それさんばいまつりと申すは……」

一、「昼のまつりには……」

一、「田植え申す日の大将は……」

一、「大鼓頭と牛使いといこんあるときは……」

一、「田植の双紙と申すは……」

「日本國の生成」の章は、「新宅屋本」を除いていずれの本でも

第一段に吸収されている。別の言い方をすると、「さんばいまつり」の「由來」よりも「仕方」について取り立てる形になつてゐる。「新宅屋本」の構成は孤例であるが、「由來」を語る言葉としてはむしろこちらが正当であるとも言えるだろう。

まず(Ⅱ)の初めの「それ」が「けれ」となつてゐること、
「けれ」で前段の叙述(さんばいの威徳)を詠嘆し、続けて「日本國の生成」までをもさんばいの威徳による事蹟に含めて記述したといふことで、ここに改まった切れ目を設けていないということである。かわりに、(Ⅱ)のbの前の「それにあて」が「それ」となつてゐるということは、「有久本」がここに区切りを認めているということである。

「新宅屋本」のように「それにあて」であれば(Ⅱ)のbは(Ⅱ)のaの内容を受け、「鋤、鍬 えぶり、大足などを使って

日本國を造成されたので、そのいわれを受けてさんばいまつりを以下のように執り行なうのだ」と言つてゐることになる。(田の中には「さんばい棚」をしつらえることの意味をそのいわれに求めているのである。)「有久本」の場合はそうではなく、(Ⅱ)のb以下を「日本國の生成」と切り離してとらえているのである。

他のNの系統の、「青雀本」、「天川本」、「小切本」、またⅡ

二、「歌い始め歌」について

「新宅屋本」は「さんばい由来書き」のあと、「うたいはしめうたに」とあり、以下のようないつ歌群から始まつてゐる。前述したように「有久本」は「さんばい由来書き」の後半から破損があるが、冒頭歌は「新宅屋本」と同じ歌詞で始まつており、そこには欠落がないものと考えてよからう。ただし「有久本」は全20句からなつてゐる。「新宅屋本」はその20句をその順に含みながらも、さらに13

句を増補し、全33句からなつてゐる。増補された句はどのような性質のものであろうか。

「有久本」「新宅屋本」の共通句を通して番号を付けて上部に、「新宅屋本」で増補された句をa～mの記号を付けてやや下げて記してみよう。（表記は意味をとつて私に改めた。以下同じ。）

1 なんと早稻苗、植えて育てて、稻鶴姫に参らせう
2 苗の初穂は三社の神に参らせう

a 初めか、さんばい正徳 はかゆかう
b 植えては、稻鶴姫に参らせう

c なんと早稻苗、先ずさんばいに参らせう

3 苗を植えては、参らう伊勢の明神

4 苗が良ければ、げに住吉へ参らせう

5 苗の初穂を上げうや賀茂の明神

6 賀茂の明神、参れば福を授かる

7 なにと、良い田や、吉野へ稻がなびいた

d なにと、植えては、参れば宇佐の八幡

e 宇佐の八幡、参れば福を給ふる

f なにと、なうかの明神処へ参れや

g 苗を植えて参れや、なうかの明神

h う□せ参れや、なうかの宮のさせたよ

i なにと、植えては、なうかの宮へ参れや

j なにと、植えさしよ、なうかの宮の広田を

k 鳥止まりて、吉野へ森が撓うだ

8 歌の初穂は先ずさんばいに参らせう
9 歌は知らねど、草紙の大工出やるまで

10 歌の草紙は、なる天竺へ取られた
11月と一度に花見に来たが、凄いか

12 光輝く、明星星か、螢か

13 連れて来たもの、まだ人慣れぬものを

14 五月早乙女、今こそ忍び降ろいた

15 旅の早乙女、あい付けされや地下人

16 忍び降ろいて、あい付け花が咲いたぞ

17 ここへ降りされ、いさみの心付けに

18 声をならせや、ならさん声は寝声な

19 起きて髪解け、殿田に太鼓鳴るもの

20 稚児が打つやる、今朝打つ太鼓、音の良さ

1 宮島に、打つや太鼓が、音戸の瀬戸へ聞こえた

m 東、光るは、明星星か、お月か

友久武文氏の『続校本田植草紙』を見ると、第三句にaを置く歌

を収める田植本に『樽床後藤本田歌用集記』「豊平万束屋本田唄集」

(以上Ⅱ類) 「田うゑ歌写」(Ⅲ類) がある。他のところでも見ら

れるよう、「新宅屋本」はⅣ類の歌本でありながら、Ⅱ、Ⅲ類の伝

承歌をも取り込む傾向がある。

右の内b、cは1、2の類歌。「有久本」でも8に2の類歌を繰り返すような例が見られるが、類歌の繰り返しは、歌い始めの一つ歌の歌唱上の実際を反映したものかもしだい。d、eも5、6の

類歌。これは系統諸本にみられないが、宮の名前を変えて歌う場合を記録したものと思われる。f～jも系統諸本に見られない独自歌。3やdから展開して歌われたものであろうか。kは7の類歌。

「吉野へ森がたわむ」歌は「雜穀屋本」(Iのc類)や「叶谷本」

「横路本」(以上、II類)にあり、「青雀本」も採っているが、

「鳥止まりて……」と歌うところが「新宅屋本」独自である。1、

mは一つ歌として系統本に広く類歌がある。

この「歌い始め歌」は、1～8でさんばいをはじめ田植にかかわる神々への崇敬を歌ったのち、9、10で、自分は歌の名手が出るまでの繋ぎとして歌うのだと、音頭取りとしての謙遜を表明し、さらに、歌の草紙も天竺に取られたから(そのためうまく歌えない)、

と「由来書き」にいう伝説をその理由付けに援用している。こうして1～10には「田の神崇敬」→「音頭取りの謙遜」といった意味上の展開を読み取ることができる。

11以下は飛躍のある配列だが、「忍ぶ恋」と「朝帰り」の情景が浮き出しており、後の「恋歌」の連鎖に続く雰囲気づくりをしているものと思われる。

「田植由来記并ニ植歌」(IのA類)や「田植歌雜紙」(IのB類)では、この情景は「さんばい歌」のオロシ(田植歌の第一行目をオヤウタ、第二行目をコウタ、第三行目以下をオロシと呼ぶ)の中で歌い込まれている。

さんばい／＼とまづる神なればな
はり柱かいて給れ、よいや、おさんばいな

今日の広田へ、さんばい降ろし参らせう
あれに見えたば、明星星の朝日か

露に打たれる、鳥帽子に時雨かかる

君の朝立ち、惜し、見うにも霧が深うて

(「田植由来記并ニ植歌」三)

抑制の効いた表現で後朝の情景を歌つており、「洗練され、昇華されたよさをかもしだしている」(真鍋昌弘氏『田植草紙歌謡全集注』七七頁)ということができる。「有久本」「新宅屋本」の場合も同じ発想を「歌い始め」の一つ歌の配列の中で表現しているのである。

三、「恋歌」歌群の展開について

「歌い始め」の一つ歌群に統いて「有久本」には、次の歌がある。

「新宅屋本」の相当歌ではオロシの最終句がなく、代わりに()の二句がある。

二、今朝鳴いた鳥の声、良い鳥の声やれ

田一反に五石は、良い鳥の声やれ
なにと良い鳥 米八石と歌うた
ひよこが、未だ巣の内か、寝声な
ひよこが、今、巣離れをしたげな
鳥が歌うて、夜深に、殿を戻した

我が殿御は、今朝、卯のときに立たれた

殿御戻すに、な吹いそ、今朝の嵐は（「新宅屋本」欠）

（殿御も、今朝、朝驅ける姿は）

（今朝も鳴いたる、めでたい鳥の声んだ）

（殿と語らう、うるさい山の裾んで）

（なにと、怖し、夜明けの鐘を早や撞く）

（人に語るな、夜來て、夜またととうるは）

（露を払うて刈る 露山の笹草）

（名惜しくと、去のうや、起きて我がや□（わかやく））

（起きてお帰れ、番屋の人が起きたぞ）

（語り過こいて、番屋の人が起きたぞ）

（忍ぶ殿殿は、小太刀を寝屋に忘れた）

（なにと、輝く、昴の星か篝火か）

（空に輝く、明星星か、お月か）

（この歌、小切本）にも見られるが伝承の広がりは狭い。歌い

始め」の一つ歌群の後半に歌われていた朝帰りの情景の中から、あ

らため明星の歌を取り出し、独立させたものと見られる。先にも

見たように「新宅屋本」には関連歌を雜纂的に集める傾向があり、

ここも歌の配列としてはやや過剰を感じさせられるところである。

さて、続く「恋歌」は次のようにある。ここにも「新宅屋本」に

増補句が見られるので該当する位置に（ ）で示す。

○西の方に光るは何の光かやな

○思ふ殿御と寝たるその夜にはな

（人のさいあひ、あひ吹く風の寒いに）

①

②③は「有久本」四のオロシに類歌がある。①は「田植歌雜紙」（IのB類）以下、系統本に広く見られる。④はオロシ一句めの「恨めし」を「怖し」に変えての重出。⑤は「田所・亀田本」（IのB類）に、また⑥の「露を払うて…」の類句は「田植草紙」にも見られる。ここでも、一首としての文艺的なまとまりよりも、諸本の類句を広くあつめようとする「新宅屋本」の傾向を見て取ることができる。

続いて、「新宅屋本」では次の歌が来る。

○手水の水こそ、あひの清水にな

（今朝も乞ひ来て、手水の水と乞はれた）

なにと、声聞け、夜明けの鳥が早や鳴く

（むくの筍、朝草刈りが見付けた）

⑤ ④ ③ ② ①

(2) はコウタの位置にあるけれども、詞形から見るとオヤウタで、たとえば「田植由来記并ニ植歌」(IのA類)や「田歌用集記」(II類)などにオヤウタとして類歌がある。(2)以外はオロシで、それぞれ系統本に広く類歌が見られるが、この順にまとめられているものはない。こういうところにも「新宅屋本」の雑纂的な性格がのぞいていると言えるだろう。

「有久本」にはこの歌はなく、「有久本」では「恋歌」歌群は次のように展開し、九以下の「化粧歌」歌群に続いている。各歌をオヤウタで代表させて記そう。(下にそれぞれの歌のキーワードをあげた。)

四殿御と寝たる夜に 口吸はんことなし
五夕べの人々は 誰を誰と覚えた
六裏の口の車戸を 今朝開けて見たれば
七今朝夙の殿ばらは 馬に乗り連れて
八今朝夙に 殿ばら、どこへござる

(寝肌惜し)
(京の六郎)

(朝日)

(草刈り)

(出会いの清水)

以下、九から一六まで「化粧歌」歌群が來、そのあとは次のようである。

一七朝寝をせうより、起きて沖を見やれ

(朝船漕いだ)

一八朝日さす、やれ、細戸に開けて見渡せば

(枕に朝日)

一九向かひなる大寺を、今朝、起きて見たれば

(花折りかざす)

二〇今朝夙に こ鳥が露にしょぼ濡れ□□

(桔梗の空に)

二一奥山の小兔は、何を食ふてこれまで

(露に濡れて)

二二宇治茶山の茶園を、今朝、起きて見たれば

(露を払うて)

二三今朝、卯のとき、山の端を見たれば

(御仙の霧)

四、まとめと今後の課題

以上、一二三を通して、石見・中野地区に伝承される二種の田植本の所載歌について、主としてその配列に注目しながらそれぞれの特徴の一端を考察し、以下のようない点を明らかにすることができた。
1. 「有久本」は歌の配列に見られる文芸性が優れており、抑制された表現によって、よく主題を表すことに成功しているといふことができる。

二四今朝、霧のまぎれに雉が鳴く、殿ばら (羽根をのして)
以上、二から二四への歌の配列を通して、夜明けに殿御を送り出し、朝日が登り、身繕いし、やがて次第に夜が明けはなれて行くといつた時間の流れを読みとることができる。
一七以下の部分は、「新宅屋本」では次のように配列されている。
一八朝日さす、やれ、細戸に開けて見渡せば

2. 「新宅屋本」は系統諸本の関連歌を雑纂的に広く収めようとする傾向があり、主題の表現よりは類似歌の集成を優先させるところが見られる。

本稿では考察が朝歌に止まり、昼歌、晩歌の検討にまで及ぶことができなかつたが、「有久本」と「新宅屋本」の全体としての傾向は前節までにとらえたところを動かないものと考えている。

田植本の文芸性の考察のためには、本稿で試みた配列の問題にあわせて、各歌ごとの、オヤコウタからオロシへの展開の様相を見る必要がある。その点の考察を今後の課題としていたい。

以下に、関心を残していることの一例をあげて今後の考察への手掛かりとしておこう。

「新宅屋本」に次のような歌がある。（「有久本」ではない）

口の白い小蛇くもへが、しらげの米よね食くわえて

それ見て、鍵とりが蔵の戸を開いた

鍵を手に持ち、姿を見れば我が殿

（六六）

これは「青笹本」に類歌があり、次のようにある。

口の白い小蛇くもへが、白米よね食くわえて

それ見て、鍵とりが蔵の御戸みど開いた

米を食くわえて田主の蔵へ

（一七四）

また、「金井坐本田植歌之巻」（IのC類）では次のようにある。

口白の蛇くもへが、白げ米食くわえて

それ見て、鍵とりが蔵の御戸みど開いた

蔵の御戸みどをば米積くみたいと開いた

（五五）

三者はオヤコウタは共通だがオロシの添え方が異なる。「青笹本」と「金井坐本田植歌之巻」の場合は、ともに蔵の中に米を積むいわば豊作の期待を歌う歌となつており、これがこのオヤコウタからの展開としては一般的な姿であつたろうと考えられる。これに対して「新宅屋本」の場合には発想の転換が見られ、意外にも恋の歌としてまとめられた。このようなオロシ展開の「新しさ」は「新宅屋本」のほかの歌にも見られるであろうか。

一方、全体として「新宅屋本」に近い内容を持つ、明治の書写本「小切本」ではこの歌は次のようになつていて。

口の白い小蛇くもへが、神の鍵を食くわえて

それを見て神主じんしゅが、神の戸を開くよ

神の扉を開いて見たらば

（五一）

この場合は、オヤコウタ自身から、旧来の田植本に見られた「神圣なる稻穂を蔵に積み込む」という伝承内容が消え、行間の飛躍も失われて、「神の使いの白蛇が神社の鍵をもたらし、神主がその鍵で扉を開く」という、説明的な内容に展開してしまつていて。

以上例示したような、オヤコウタからオロシへとつながる田植歌詞章の表現の姿について、両本の実態を検討する作業を、残された主要な課題としておきたい。

（たなか・えいいち／島根大学）